

# 上野遺跡

—県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2008年3月

青森県教育委員会

## 序

上野遺跡の位置する青森市浪岡地区は、縄文時代から現代にいたるまでの長い間、人々が深く関わりをもってきた地域です。

青森県埋蔵文化財調査センターでは、県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業に伴い、平成18年度に青森市上野遺跡の発掘調査を実施しました。この調査によって、縄文時代前期後半から中期前半の土器・平安時代の溝、土坑などの遺構や、土師器・須恵器などの遺物が発見されました。

本報告書は、その調査結果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また地域社会の歴史教育等に利用されることを期待します。

最後に、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導、御協力をいただきました多くの方々に対し、深く感謝の意を表します。

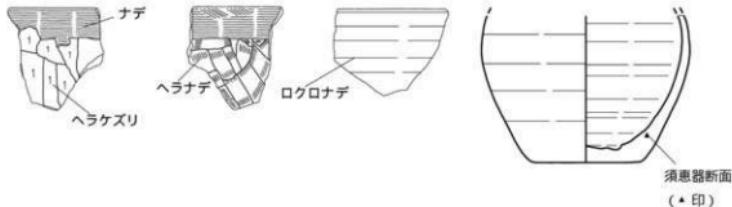
平成20年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 末永五郎

## 例　　言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが県道五所川原浪岡線交通安全施設整備に伴い、平成18年度に調査を実施した青森市上野遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 上野遺跡の所在地は、青森市浪岡大字椿沢字村元地内、青森県道跡番号は29011である。
- 3 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事岩田安之が、編集は岩田と同センター調査補助員小幡育恵が行った。
- 4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 5 挿図に付した北の方位は、すべて座標北である。
- 6 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真的縮尺は統一していない。
- 7 土層等の色調観察には農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編2003年版)を使用した。
- 8 遺物の写真撮影は、シルバーフォト(青森市)に委託した。
- 9 本書に掲載した地図は、国土地理院刊行の5万分の1地形図「青森西部」を複写して使用した。
- 10 挿図中の表現は、以下にしたがった。



- 11 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。
- 12 発掘調査及び報告書の作成における出土品・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 13 発掘調査及び本報告書作成にあたり、次の機関並びに諸氏から御教示、御指導を受けた。  
(50音順、敬称略)

青森市教育委員会・小野 貴之・木村 浩一・工藤 清泰・児玉 大成・設楽 政健・竹ヶ原 亜希・福田 友之

# 目 次

序

　　例言

　　目次

## 第1章 調査の概要

第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査要項	2
第3節 調査方法と整理方法	3
第4節 調査経過	3

## 第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第2節 遺跡周辺の地形・地質	8

## 第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と出土遺物	11
第2節 遺構外出土遺物	14

## 第4章まとめ

まとめ	23
引用・参考文献	23
遺物観察表	24
写真図版	25
報告書抄録	

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至るまでの経過

青森市浪岡地区に所在する上野遺跡及びその隣接地が青森県県土整備事務所所管の県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業の工事予定地となったことから、平成17年8月に文化財保護課による現地確認が行われた。この調査によって、工事予定地周辺には縄文土器や平安時代の土師器等が散在していたことから工事予定地が遺跡に含まれていることや遺跡の範囲が拡張されることが判明した。この結果を受けて、青森県県土整備部道路課及び東青地域県民局道路管理課と青森県教育庁文化財保護課が遺跡の取り扱いについて協議を行い、平成18年度に発掘調査を行うことになった。

平成17年10月に青森県県土整備事務所と県文化財保護課及び青森県埋蔵文化財調査センターが現地確認を行い、用地買収の状況、調査上の問題点、プレハブ・駐車場等の確認を行った。その結果、用地買収の進んでいる南側の区域を平成18年度に発掘調査を実施し、用地買収が遅れている北側の区域は平成19年度に実施することになった。

平成18年6月青森県県土整備事務所名で周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事等のための発掘に関する届出があり、これを受けて平成18年7月に青森県教育委員会から当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成のための発掘調査の実施の指示がなされた。

なお、平成19年度に発掘調査を実施する予定であった北側の区域は、用地買収の遅れから次年度に先送りされ、平成20年度に発掘調査を実施することになった。

(畠山 昇)



調査開始前風景

## 第2節 調査要項

### 1 調査目的

県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する上野遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2 発掘調査期間

平成18年8月1日（火）から同年9月29日（金）まで

### 3 遺跡及び所在地

上野遺跡（青森県遺跡番号 29011）

青森県浪岡大字椿沢字村元

### 4 調査対象面積

2,800 平方メートル

### 5 調査委託者

県土整備部道路課

### 6 調査受託者

青森県教育委員会

### 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査体制

調査指導員 藤沼 邦彦 国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）

調査員 島口 天 青森県立郷土館学芸主査（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 白鳥 隆昭（現 青森県立郷土館長）

次長 三浦 圭介（平成19年3月退職）

総務 GL 櫻庭 孝雄

総括主幹 成田 滋彦（現 副参事）

文化財保護主事 岩田 安之

調査補助員 小木 栄理・小幡 育恵・楠見 匠・山田 和茂

### 第3節 調査方法と整理方法

平成18年度の調査は、調査区が長細いため、トレンチを各所に設定して遺構・遺物の密度をとらえることを第一とし、遺構がトレンチ外に延びる場合はトレンチを拡張して調査する方針で行った。また、調査区が民家・車道沿いであるため、安全対策のバリケードを設置し、夜間は調査区の存在が分かるように反射板、発光点滅器をバリケードに付け、注意を喚起した。掘削による堆土は風雨での飛散、流出を防ぐため、土嚢袋に入れてトレンチ横に積み上げ、調査が終了したトレンチ内へ埋め戻した。

グリッド設定は、青森県県土整備事務所道路管理課が設定した幅杭などの座標から4mメッシュを設定した。東から西へ調査年度が移行するためローマ数字と英語のアルファベットを組み合わせたものを東から西へ付し、南から北へは算用数字を付した。区画名は南東杭の呼称を用いた。標高値は、調査区近くに存在するKBMを与点とし、調査区内に数點所設定した。

遺構精査は2分法、4分法を基本とした。調査区が長細く通り方測量が困難であるため、遺構の平面図は光波トランシット、遺構実測支援ソフト「遺構くん」を用いて作成した。遺物の取り上げはグリッド、層位ごとに行い、場合により1点ずつ位置と標高を記録して取り上げた。

写真撮影は35mmカメラ、デジタルカメラを使用し、35mmカメラにはモノクローム、カラーリバーサルフィルムを使用した。

報告書作成に伴う整理作業は、遺物の水洗い、注記終了後、4月から行った。出土遺物量が少ないため、形態の復元可能なものはすべて実測を行い、掲載することに努めた。

### 第4節 調査経過

8月1日 器材を搬入し、草刈りなどの環境整備を行った。

8月2日 トレンチを設定し、掘削を開始した。

8月8日 平安時代の遺構と推測される溝が確認される。

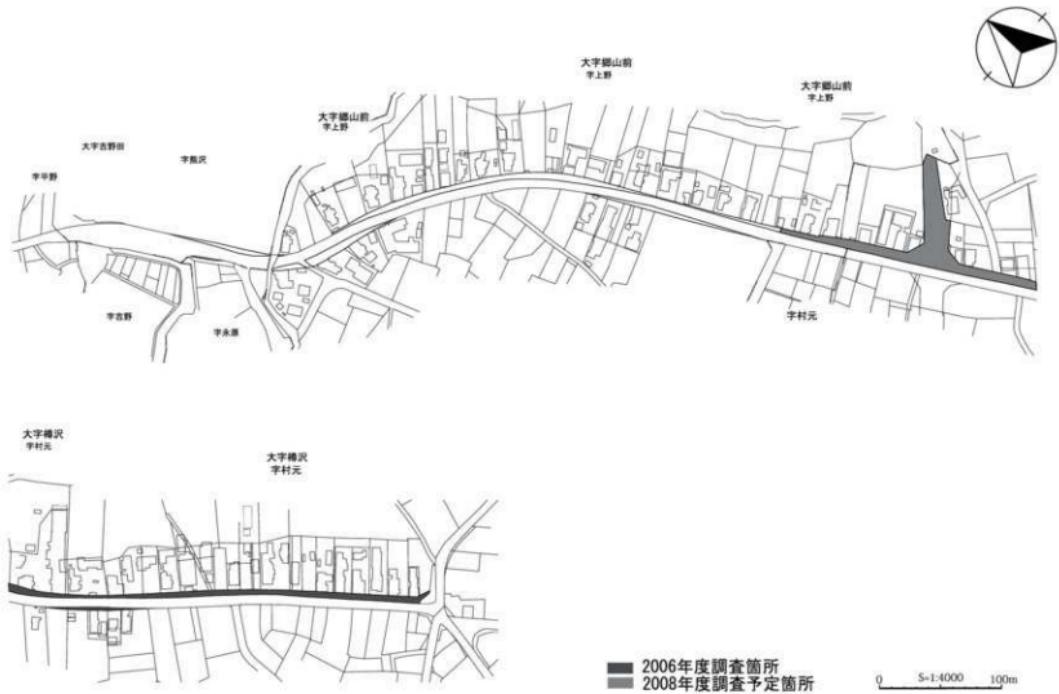
8月10日 柱穴や土坑が確認される。

8月24日 トレンチ4で縄文土器が出土する。

9月15日 溝7（大溝）確認。

9月29日 溝7精査終了。調査器材、出土遺物を搬出し、予定通り調査を終了した。

図1 調査対象区域図



## 第2章 遺跡周辺の環境

### 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

上野遺跡は津軽山地南端の梵珠山地西縁に分布する低位段丘上に位置する。周辺には縄文時代から近世にかけて数多くの遺跡が確認されており、当該地域が古くから生活に適した場所であったことがうかがえる。

縄文時代の遺跡では、当センターが平成19年度に発掘調査を実施した中平遺跡から後期前葉の集落跡と捨て場が確認されている。

平安時代には、上野遺跡とは津軽山地を挟んで反対側に位置する大沢迦川右岸の低位段丘上に、大規模な集落遺跡が多く確認されている。野尻遺跡群は9世紀後半から10世紀中葉、10世紀中葉から10世紀後半を主体とする。外周溝と掘立柱建物跡を付属させた竪穴住居跡が多数確認されており、野尻遺跡群を特徴づける遺構となっている。また、野尻(2)遺跡では墳墓と考えられる円形周溝遺構がまとまって発見され、9世紀後半から10世紀中葉の墓域ととらえられている。野尻(4)遺跡では、高屋敷館遺跡以前の小規模な環濠が見つかっている。高屋敷館遺跡は野尻遺跡群に北接する。10世紀後半から12世紀前葉にかけて、竪穴住居跡を主体とした集落を濠と土塁が取り囲む形態の集落遺跡であり、防御性集落、環濠集落などと呼称されている。集落の規模は大きく、150軒以上の竪穴住居跡の存在が予想されている。山元(1)・(2)・(3)遺跡は高屋敷館遺跡の南にある。9世紀から10世紀前半が中心となる集落跡である。大沢迦川右岸地域では、このように住居や集落の形態を変化せながら、平安時代中頃から中世前半まで当該地域の中心であったものと推測される。

上野遺跡を含むこれらの集落跡に須恵器を供給した五所川原須恵器窯跡群が北方に位置している。9世紀後葉に高野(KY)支群で操業を開始し、10世紀初頭から前葉にあたる持子沢(MZ)支群において操業を拡大し、前田野目(MD)支群に至り、周辺の遺跡数が減少する10世紀後葉には操業を停止する(『県史』2005:481)。上野遺跡では前田野目(MD)支群で生産されたと推測される須恵器の梗が中心に出土している。ちょうど前田野目支群において食膳具がほとんど製作されなくなり、貯蔵具中心に生産をシフトした時期に重なると推測される。具体的な年代では、10世紀中頃から後半の年代が与えられると思われる。また持子沢(MZ)支群南部近くには、隣川(4)・(12)遺跡があり、竪穴住居跡内からロクロピットや土師器・須恵器の素材粘土が出土していることなどから、土器製作に関わる集落跡と推測されている。野尻(1)遺跡に北接する山本遺跡、浪岡城の東の台地上にある羽黒平(1)遺跡では9世紀から10世紀にかけての精錬・鍛冶などを行った鉄生産関連遺構が発見されている。

このように津軽山地南端部一帯では土器生産集落跡、鉄生産遺構を有する集落跡、一般的な集落などがあり、生産、流通、消費といった本地域における古代社会の実態を考察する上で重要である。

中世では北畠氏の居城であった浪岡城跡がある。浪岡城跡は、8カ所の平場からなり、発掘調査が行われた箇所では、多くの掘立柱建物跡、竪穴建物跡、戸井跡などが発見されている。また、多くの中国、朝鮮産の陶磁器や瀬戸・美濃、珠洲、越前、唐津、備前産など国産のさまざまな陶磁器、銅鏡などの金属製品、埋納錢など、城館跡やその周辺の中世の社会を考察するための貴重な資料が得られている。



図2 上野遺跡と周辺の遺跡

## 旧浪岡町

番号	遺跡番号	遺跡名	時代
1	29001	早稲田遺跡	平安
2	29002	高須沢遺跡	平安(後・晩)、平安
3	29003	高須沢削道跡	平安
4	29004	下平遺跡	平安
5	29005	船(1)遺跡	平安
6	29006	船(2)遺跡	平安
7	29007	中平(1)遺跡	绳文(中・後)
8	29008	中平(2)遺跡	绳文(中)
9	29009	熊沢池遺跡	平安
10	29010	水原遺跡	绳文(前・後)
11	29011	上野遺跡	绳文(中・後)
12	29012	神宮遺跡	绳文(晚)、平安
13	29013	山神宮遺跡	绳文(中)
14	29014	長瀬遺跡	绳文(中・後)、平安
15	29015	大林遺跡	平安
16	29016	大沼遺跡	平安
17	29020	飛岡遺跡	中世
18	29022	沖ノ瀬遺跡	平安
19	29048	人形埴輪(船の彌)	中世
20	29049	山元古跡	平安
21	29050	川原廻(川原廻市)	中世
22	29051	御船(杉御船、尾林船)	中世
23	29054	山元(1)遺跡	绳文、平安
24	29055	山元(2)遺跡	平安
25	29056	山元(3)遺跡	绳文、平安
26	29058	吉田田平野遺跡	平安
27	29059	寺原敷平遺跡	平安
28	29060	野反(1)遺跡	绳文、平安
29	29061	野反(2)遺跡	绳文、平安
30	29062	野反(3)遺跡	平安、中世、近世
31	29063	野反(4)遺跡	

## 五所川原市

番号	遺跡番号	遺跡名	時代
32	SM1号窯	(桜・鶴(1)遺跡)	绳文、平安
33	SM2号窯	(桜・鶴(2)遺跡)	绳文、平安
34	HK1号窯	(山道廻池遺跡)	平安
35	HK2号窯	(山道廻池遺跡)	平安
36	HK3号窯	(山道廻池遺跡)	平安
37	HK4号窯	(原子廻池(4)遺跡)	平安
38	HKS5号窯	(原子廻池)	平安
39	HK6号窯	(原子(2)遺跡)	平安
40	M01号窯	(砂田1号窯)	平安
41	M02号窯	(砂田2号窯)	平安
42	M03号窯	(砂田(6)遺跡)	平安
43	M04号窯	(6号(1)遺跡)	平安
44	M05号窯	(6号(1)遺跡2号窯)	平安
45	M06号窯	(鶴(2)遺跡)	平安
46	M07号窯	(大走(3)遺跡)	平安
47	M08号窯	(砂田(1)遺跡)	平安
48	M09号窯	(砂田(2)遺跡)	平安
49	M10号窯	(砂田(3)遺跡)	平安
50	M094号窯	(砂田(4)遺跡)	
51	M095号窯	(前田野目(1)遺跡)	
52	M096号窯	(前田野目(2)遺跡)	

## 五所川原市

番号	遺跡番号	遺跡名	時代
53	05096	MD14号窯	
54	05097	(前田野目(2)遺跡)	
55	05098	MD15号窯	
56	05013	(砂田C遺跡)	平安
57	05099	(前田野目(5)遺跡)	
58	05021	(持子沢A遺跡)	平安
59	05022	(持子沢B遺跡)	平安
60	05023	(持子沢C遺跡)	平安
61	05024	(持子沢D遺跡)	平安
62	05092	(鷹川(13)遺跡)	
63	05020	鷹川(1)遺跡	绳文(中・後)、平安
64	05079	(原無(7)遺跡)	绳文
65	05070	(鷹川(10)遺跡)	绳文、平安
66	05023	(持子沢C遺跡)	平安
67	05024	(持子沢D遺跡)	平安
68	05024	(持子沢E遺跡)	平安
69	05024	(持子沢F遺跡)	平安
70	05181	KY1号窯 (広野遺跡)	
71	05063	鬼子鹿池(1)遺跡	绳文(前・中)、平安
72	05004	鬼子鹿池(2)遺跡	绳文(前・中・後)
73	05005	鬼子鹿池(3)遺跡	绳文(中)
74	05006	鬼子鹿池	近世
75	05007	野里遺跡	绳文(晚)、平安
76	05008	川崎遺跡	绳文、平安
77	05018	持子沢	绳文(後)、平安、中世
78	05019	鷹野長坂遺跡	绳文(晚)、平安
79	05025	堤山遺跡	平安
80	05040	原子廻池(5)遺跡	绳文(前)、中世
81	05043	真言院遺跡	平安
82	05051	大走(1)遺跡	平安
83	05059	板ヶ峰(2)遺跡	绳文
84	05060	板ヶ峰(3)遺跡	绳文、平安
85	05061	大走(2)遺跡	平安
86	05062	鷹川(2)遺跡	平安、近世
87	05063	鷹川(3)遺跡	平安、近世
88	05064	鷹川(4)遺跡	平安
89	05065	鷹川(5)遺跡	平安
90	05066	鷹川(6)遺跡	绳文、平安
91	05067	鷹川(7)遺跡	平安、近世
92	05068	鷹川(8)遺跡	绳文、平安
93	05069	鷹川(9)遺跡	绳文
94	05071	鷹川(11)遺跡	绳文、平安
95	05072	鷹川(12)遺跡	平安
96	05073	原無(1)遺跡	绳文、平安
97	05074	原無(2)遺跡	绳文、平安
98	05075	原無(3)遺跡	绳文、平安
99	05076	原無(4)遺跡	绳文、平安
100	05077	原無(5)遺跡	绳文
101	05078	原無(6)遺跡	绳文
102	05080	原無(8)遺跡	平安
103	05083	松代遺跡	绳文、平安
104	05088	広富遺跡	平安
105	05090	天古遺跡	平安

## 板柳町

番号	遺跡番号	遺跡名	時代
106	34006	平塚遺跡	平安
107	34007	五林平遺跡	平安
108	34010	庵井館	中世

表1 周辺の遺跡

## 第2節 遺跡周辺の地形・地質

上野遺跡周辺の地形・地質については山口義伸氏が『隈無(1)・(2)遺跡』において詳述している。本節ではそれに依拠しながら記述を行う。

### 1. 遺跡周辺の地形

上野遺跡は青森市浪岡大字樽沢字村元地内に位置し、津軽半島南端の梵珠山地西縁に分布する低位段丘上に立地する。標高70m以高は丘陵部で、その周縁部には3段の段丘群からなる前田野目台地が分布している。本遺跡は標高20~30mにあり、低位段丘面にあたる箇所にあり、100分の2と勾配が認められる。

津軽山地南端部の水系として大駿迦川および前田野目川があげられる。大駿迦川は梵珠山を発源とし梵珠山地東縁をほぼ南流、青森市浪岡で浪岡川と合流し、梵珠山地周縁の前田野目台地を大きく迂回して津軽平野へと流れ十川と合流する。本遺跡は浪岡川と十川がちょうど合流する右岸にあたる。また本遺跡周辺には宝溜池、熊沢溜池などの溜池があるが、これらは前田野目台地内に多く、梵珠山地を流れる浸食谷内にあって、平野部への出口付近を堰き止めて灌漑用水用として利用されている。

### 2. 遺跡周辺の地質

津軽半島は、新第三紀の緑色凝灰岩類および堆積岩が広く分布し、東北地方のいわゆるグリーンタフ地域に属する。半島の地層の堆積状況は半島脊梁部を南北に走る津軽断層を境に東部と西部とでは中新世(2370~530万年前)後期から鮮新世(530~170万年前)にかけての岩相および層厚が著しく異なる。東部は沈降帯、西部は隆起帯の構造を示している。

東部沈降帯は津軽断層に並行する褶曲群および断層群で特徴づけられる。堆積する地層は下位から、中新世後期の不動滝層・鮮新世の白滝橋層・六枚橋川層・沢内沢層・立山層からなる。西部隆起帯は、北部の袴腰岳ドームと南部の馬の神山ドームで特徴づけられるようにドーム構造をもち、この構造運動に伴って地層に褶曲構造がわずかに認められる。全体としてドームの西翼部の地層はうねりながら西方へ緩傾斜するが、断層に接近した東部の地層は東側に急傾斜する。堆積する地層は下位から、中新世の長根層・馬ノ神山層・源八森層・不動滝層・鮮新世の味噌ヶ沢層および立山層からなる。

平頂な大駿迦丘陵地は鶴ヶ坂層からなる火碎流台地を示すものである。高位段丘面は大駿迦丘陵地にほぼ連続する平滑な面であり、狼ノ長根付近は露頭観察から成層した軽石質砂・細粒軽石質シルト・粘土の互層からなる前田野目層で構成される。中位段丘は成層した細粒砂・シルトなどを構成層とし、低位段丘は細礫混じりの粗砂・腐食質粘土(シルト)などを構成層としている。

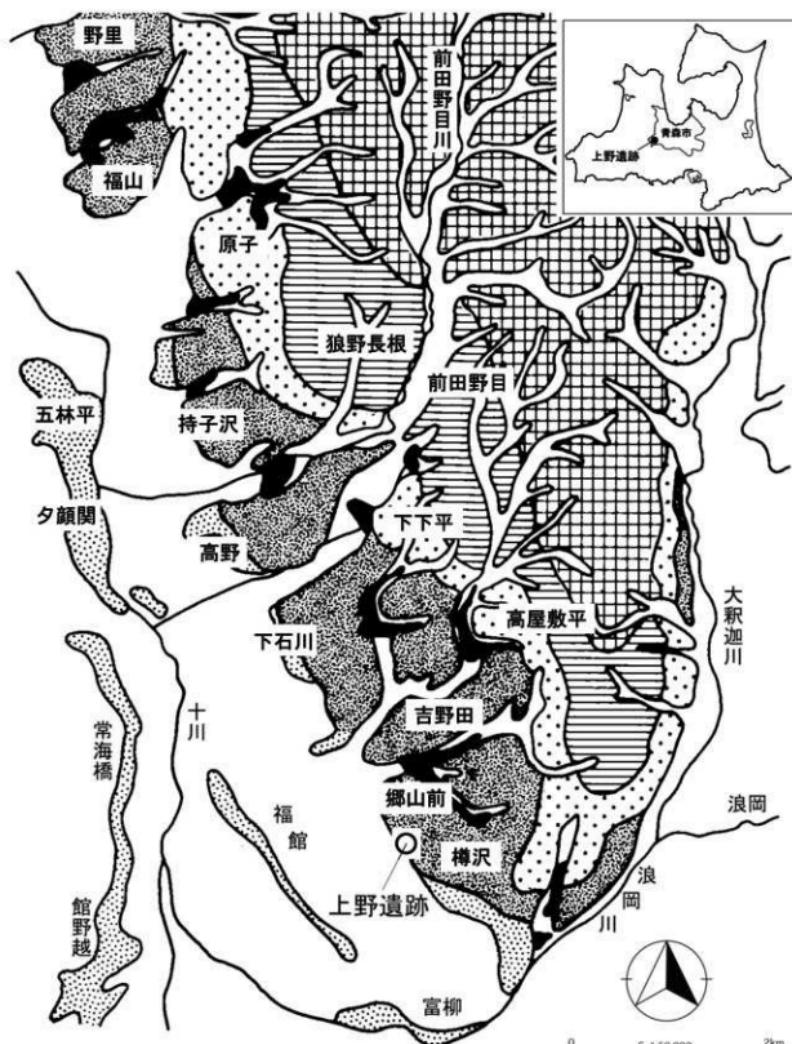


図3 遺跡周辺の地形分類図（山口 1998：8頁を改変、転載）

## 3. 基本層序

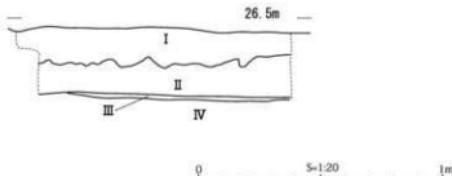
本遺跡の基本層序は調査区全域でほぼ同様の堆積が観察されたため、トレンチ13の北西壁を基準としている（図4）。住宅街の中であるため擾乱の激しい場所があり、第I層は現代の擾乱層である。第II層・第III層の欠損している箇所も多かった。

第I層 黒褐色土 10YR3/1 IV層由来土 ( $\varphi$  1~5mm) 1%混じる。近・現代の陶磁器、ガラスが出土するため、現代の層である。

第II層 黒色土 10YR1.7/1 IV層由来土 ( $\varphi$  1mm) 0.5%混じる。縄文土器、土師器、須恵器出土層。この時期の遺物以外含まれないため、縄文時代～平安時代層ととらえている。

第III層 暗褐色土 10YR3/3 II層とIV層の漸移層である。

第IV層 明黄褐色土 10YR6/8 火山灰層。当遺跡の地山になる。千曳浮石、碇ヶ関浮石に対比されると思われる。



## 第3章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 検出遺構と出土遺物

今回の調査で確認された遺構は、溝9条、土坑1基、ピット10基で、出土遺物は段ボール箱1箱と非常に少ない。基本層序第II層掘削時から確認できた遺構はあるが、多くは第III層、第IV層上面で確認した。以下、各遺構ごとに詳述する。

#### 溝1

【位置】トレント04、II X - 52, 53, II Y - 53 グリッドに位置する。【重複】なし。【形態・規模】北西 - 南東方向に延びる。北西方向の収束部分は確認できていない。確認できた部分で長さ5m、幅50cmである。断面形は逆台形を呈し、南東部で収束する。【堆積土】下部にはIV層由来土がブロック状に混じるため、壁の崩落と考えられる。上層部分はII層類似の黒色土が堆積しているため、自然堆積と推測される。【出土遺物】なし。

#### 溝2

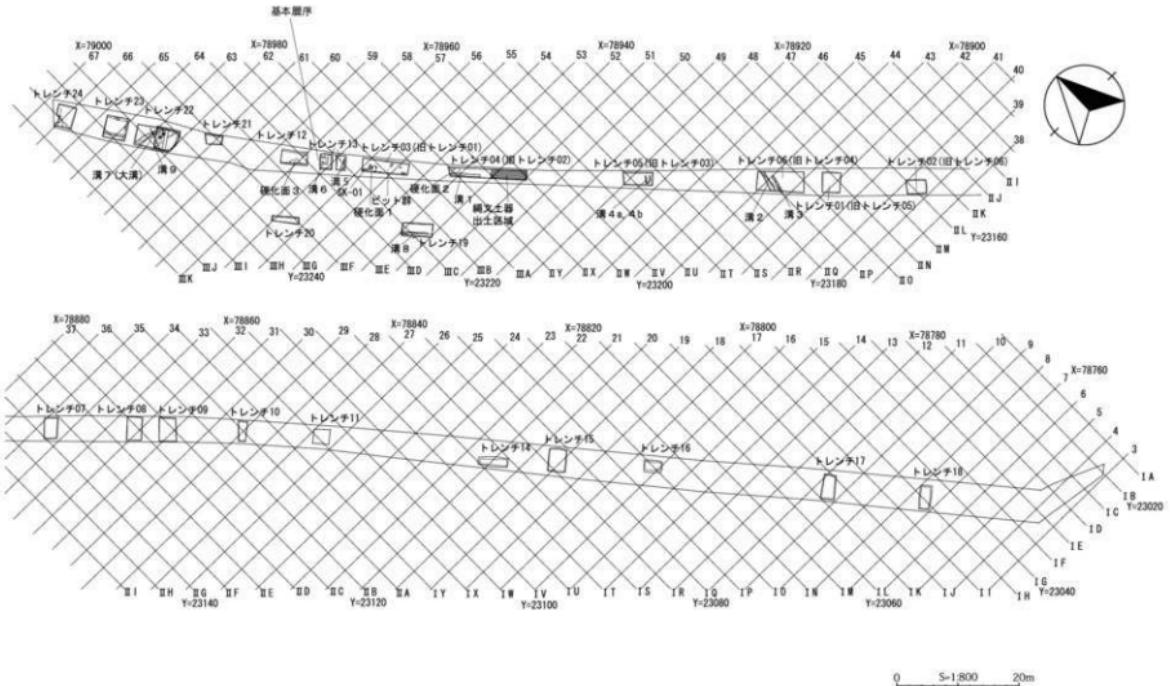
【位置】トレント06、II P - 43, 44, II O - 44 グリッドに位置する。【重複】なし。【形態・規模】北からやや東に振れるがほぼ南北方向に延びる。溝3が東側を併走する。収束部分は両端とも確認されなかった。確認部分で3m 80cmの長さを測る。断面形は逆台形を呈する。幅は60~70cmである。【堆積土】黒色土の堆積でII層に類似し、混入物がほとんどないことから自然堆積と推測される。また、埋まった後にIV層由来土がブロック状に混入したII層が堆積している。この層はIV層由来土の混入具合から他の遺構の掘り上げ土の可能性がある。併走する溝3の掘り上げ土の可能性があるため、その場合には溝3は溝2よりも新しく、溝2を作り替えたとも考えられる。【出土遺物】なし。

#### 溝3

【位置】トレント06、II O - 43 グリッドに位置する。【重複】なし。【形態・規模】北からやや東に振れる南北方向に延びる。北方向の収束部分は確認された。収束部から南に1m程の箇所で段を有し約15cm深くなる。確認部分で長さ3m 10cm 幅30cm 深さは浅い箇所は3cm 深い箇所で20cm程度である。断面形は逆台形を呈する。溝2が西側を併走する。【堆積土】II層に類似した混じりの少ない黒色土が堆積していることから自然堆積と推測される。溝2の項でも述べたように溝2より新しい可能性がある。【出土遺物】なし。

#### 溝4

【位置】トレント05、II S - 47 グリッドに位置する。【重複】溝4a、4bに分けられ、溝4aが新しい。【形態・規模】溝4a、4bとも北東-南西方向に延びる。確認されている箇所で溝4aは長さ60cm 幅50cm 深さ20cm 溝4bは長さ1m 40cm 幅90cm 深さ30cmである。断面形は双方とも逆台形である。【堆積土】双方の溝も混じりの少ないII層類似土が堆積しているため、自然堆積と推測される。【出土遺物】なし。【小結】溝4bが埋まった後、浅い溝4aを作ったと推測される。



## 溝5

【位置】トレンチ13、III B -56、III C -56グリッドに位置する。【重複】なし。【形態・規模】北東・南西方向に延びる。幅50cm 確認長2m 10cm、深さ30cmである。【堆積土】Ⅱ層由来土で構成されるため自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。

## 溝6

【位置】トレンチ13、III C -57グリッドに位置する。【重複】なし。【形態・規模】北西—南東方向に延びると推測される。確認された部分で長さ1m 20cm 幅70cm~ 150cm 深さ50cmである。南東方向に急に細くなる。断面形はH字形である。形態から溝ではなく土坑の可能性もある。【堆積土】最下層はIV層の崩落土で、2層まではIV層由来の混入土が多いため人為的に埋められた可能性が高い。1層は混じりの少ないⅡ層類似土であるため自然堆積と推測される。【出土遺物】なし

## 溝7

【位置】トレンチ22、III G -62, 63, III H -62, 63グリッドに位置する。【重複】溝9が南方向に分岐するが、堆積状況では新旧関係は判別できなかったため、同時期に埋没した可能性が高い。よって、溝7と溝9は同時機能の時期があったと推測される。【形態・規模】ほぼ東西に延びる。断面形は逆台形を呈する。南壁から溝9がほぼ直角に分岐して延びる。確認されている箇所で長さ5m、幅2m 20cm 深さ1m 【堆積土】最下層に混じりのない黒色粘質土が堆積しており、有機質が土壤化した層と推測される。その上に崩落土が堆積し、上部は混じりの少ないⅡ層類似の黒色土が堆積しているため自然堆積と推測される。【出土遺物】今回の調査で、唯一遺構内から遺物の出土した遺構である。土師器、須恵器が10層や7層を中心に出土している。これらの層は黒色土に地山の崩落土が混じることから、溝が崩落土とともに埋まっていく初期段階の堆積土と推測される。よってこれらの出土遺物は、溝が埋まる初期段階に混入したと推測される。土師器、須恵器はその特徴と溝内に白頭山起源の火山灰が確認されることから10世紀中頃から後半に属すると推測される。土師器坏はロクロ成形で、図7- 2は柱状高台様である。甕は胎土に小石などの混人物を多く含み、ヘラケズリ、ヘラナデ、ロクロナデで整形される。図7- 7は土師器の小甕の底部である。須恵器の甕はタタキ目や胎土の特徴から5個体以上の存在が推測される。他には羽口が出土している。【小結】遺構からの出土遺物はすべてこの溝7からである。溝7と溝9の新旧関係は堆積土からは判別できないことから、廃棄時が同時期であり、同時の堆積過程を経て埋没したと推測される。

## 溝8

【位置】トレンチ19、III B -52、III C -52に位置する。【重複】なし。【形態・規模】北西—南東方向に延びる。確認されている箇所で長さ5m、幅50cm 深さ40cmで一部オーバーハングする部分がある。【堆積土】混じりのないⅡ層類似土が堆積しているため、自然堆積と推測される。【出土遺物】なし。

### 溝9

【位置】トレント22、III G - 62に位置する。【重複】溝7と重複するが、堆積状況から同時期の埋没過程である。【形態・規模】おそらく南北に延びる。確認されている箇所で長さ40cm 幅不明、深さ80cm【堆積土】混じりのないII層類似土が堆積していることから自然堆積と推測される。【出土遺物】なし。【小結】溝7から南方向に直角に分岐して延びる。

### 第1号土坑

【位置】トレント03、III B - 55グリッドに位置する。【重複】なし。【形態・規模】調査区域外にかかるため平面形は不明。底面は凹凸が激しい。【堆積土】3層はIV層崩落土とII層の黒色土が混じり合いながら堆積したと推測され、上層部分はII層類似の黒色土が堆積しているため、自然堆積と推測される。【出土遺物】なし。

### ピット群

【位置】トレント03、III A - 54, 55, III B - 55グリッドに位置する。【重複】なし。【形態・規模】確認時に柱痕が確認されたピットはPit 3, 4, 5, 8である。柱痕は径10cm程度のものが3基でPit 5が径20cmと大きい。調査区が狭いこともあり、建物跡などを示唆する配置は確認されない。【堆積土】柱痕のあるピットは柱痕と掘り方埋土のセットで堆積している。掘り方埋土には黒色土にIV層由来土が多く混じる。柱痕の確認されないピットは単層であることが多く、混じりの少ないII層由来土であることから自然堆積と推測される。【出土遺物】なし。

## 第2節 遺構外出土遺物

### 1. 繩文土器

図11-29以外トレント04からまとまって出土した。図11-24~26は円筒下層d2式、27・28は円筒上層a式、29は十腰内Ia式に属する。すべて深鉢である。

24は上野遺跡で出土した縄文土器の中で唯一、口縁部から底部まで復元できた土器である。口縁部はL Rの側面圧痕を平行に4列配し、楕円形の隆帯を2つ一组にして貼り付け、その上にL Rの側面圧痕が施される。また口縁部と胴部は隆帯で区切られる。横位L R回転縄文は口唇部、胴部に施される。26は口縁部にR単軸絡条体圧痕の上から原体末端圧痕が連続的に施される。27・28は円筒上層a式の波頂部であり、隆帯が付けられる。29は十腰内Ia式の深鉢に相当すると思われる。沈線で文様が描かれる。

### 2. 平安時代の遺物

土師器・須恵器が出土しているが、量は少なく、図化できるものも少ない。平成20年度調査区域で、一部掘削を行った箇所から出土したものである。

土師器は壊、甕があるが完形をなすものではなく、すべてが破片資料である。壊より甕が多い。図11-34は内黒の壊で、内黒は1点のみ確認された。甕は粗雑なつくりで、ナデを施すもの(35)と成形痕を残すもの(31)がみられる。

須恵器は遺構外から2点出土した。32は須恵器の壊であり、外面に火禪痕がみられる。

### 3. 近代以降の遺物

図示しなかったが、近世以降の陶磁器、銭貨などが出土している。近世の遺物では「寛永通宝」が表探されている。

近代以降では昭和9年銘の「桐一銭青銅貨」、昭和14年銘の「五銭アルミ青銅貨」がトレンチ04のI層から出土している。昭和15年銘「五銭アルミ貨」は戦時中の遺物と推測されるが、銃を構えてほふく前進をする状態をかたどった陶製人形やボールを抱えたセーラー服姿の子供の陶製人形も出土している。また、時期は不明であるが土製の碁石のような形態の遺物が出土している。他にはガラス製おはじき、参天製薬の大学目薬のガラス容器がある。太平洋戦争時の統制番号の付された鉄絵磁器皿もある。これには、底裏銘「岐346」とされており、岐阜で生産された戦時中の製品であることが分かる。

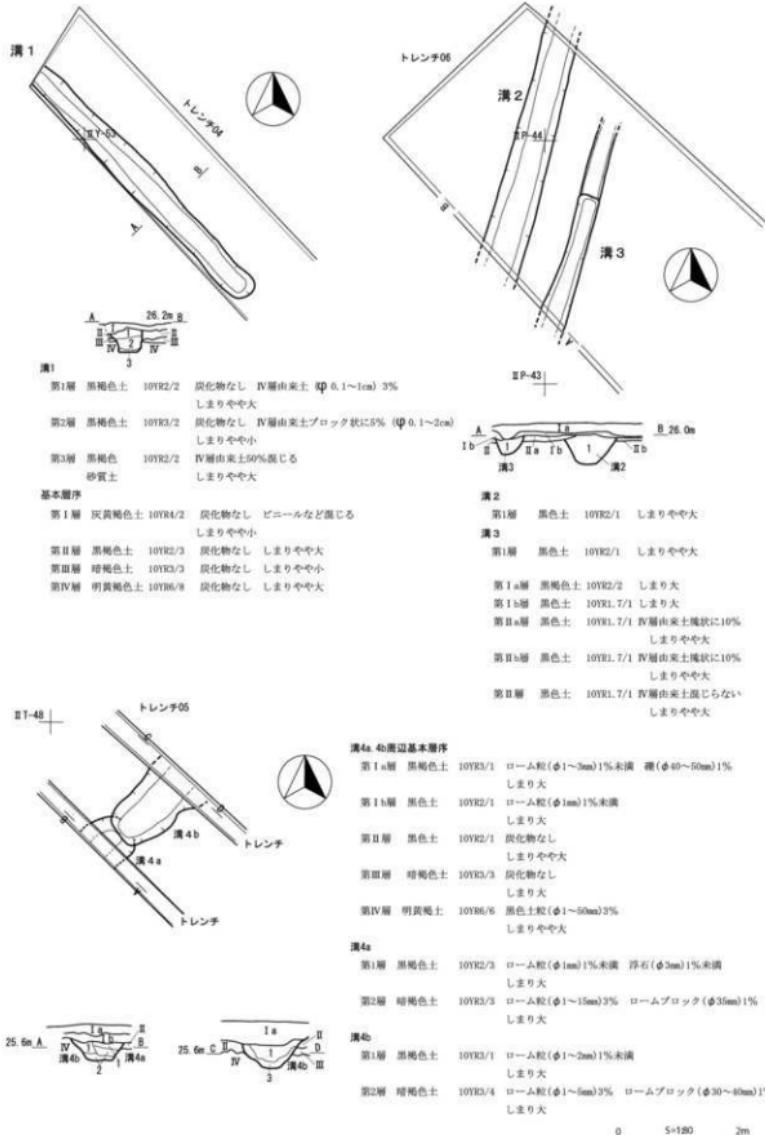


図5 溝(1)

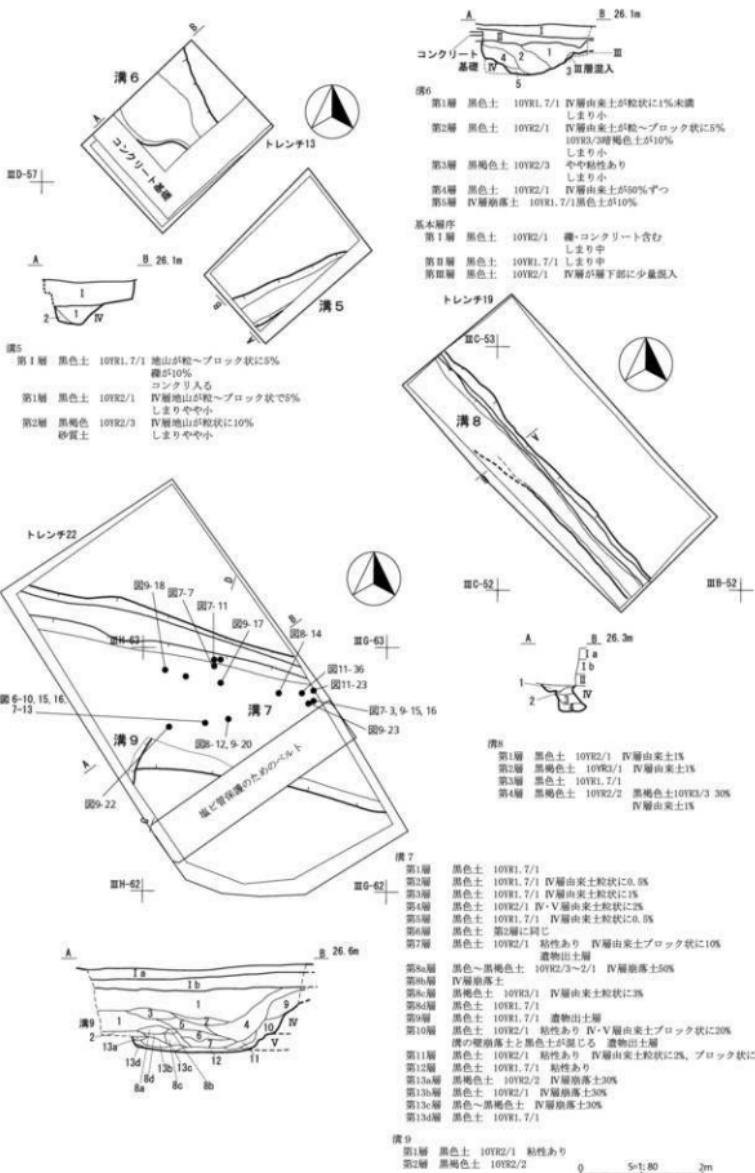


図6 溝(2)

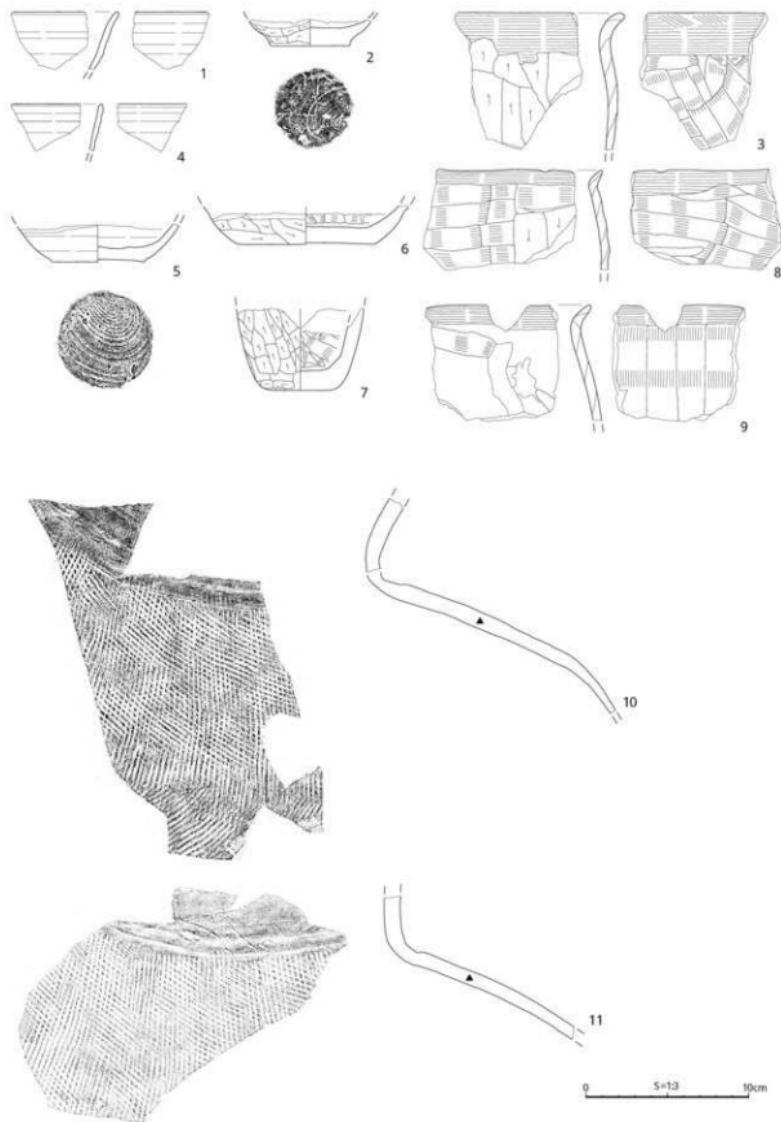


図7 溝7出土遺物(1)

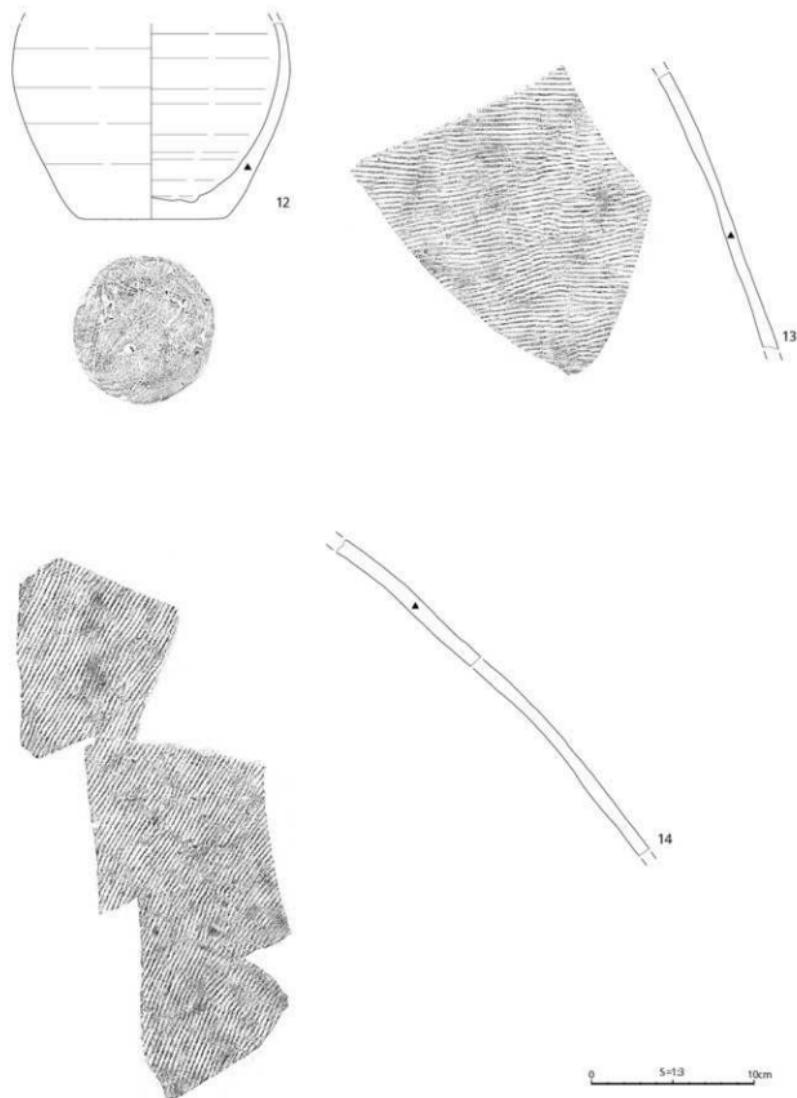


図8 溝7出土遺物(2)

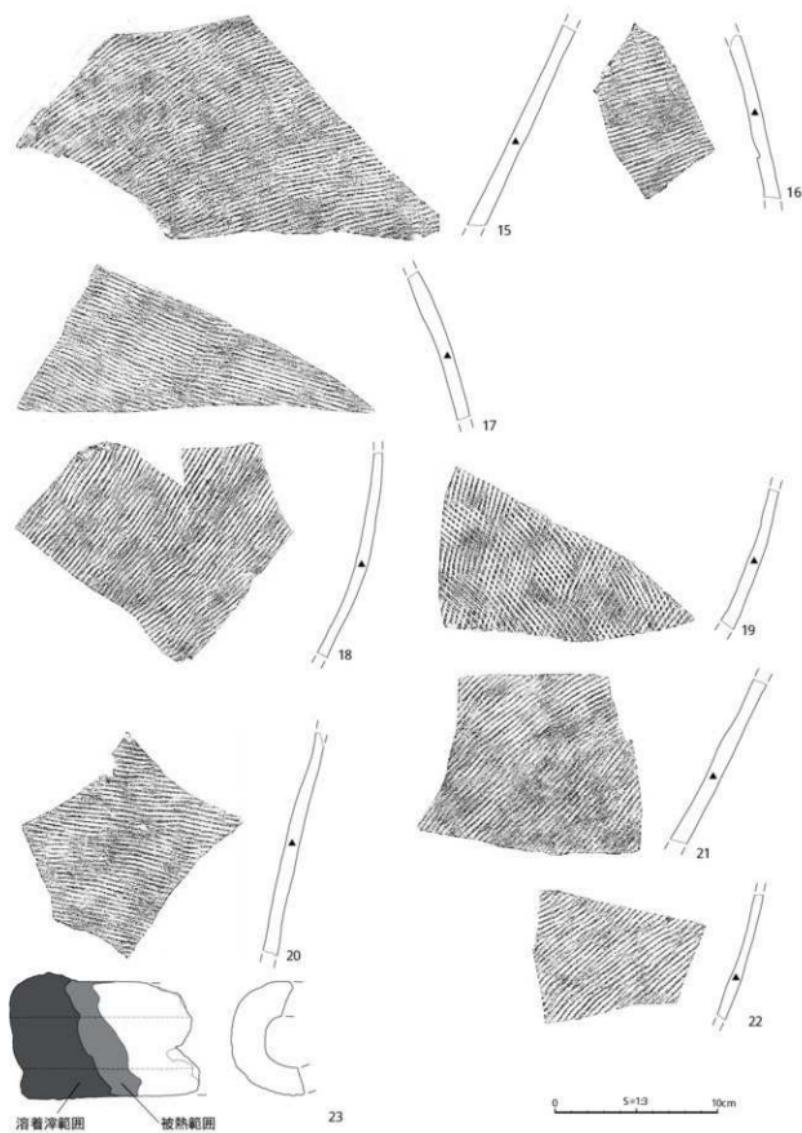


図9 溝7出土遺物(3)

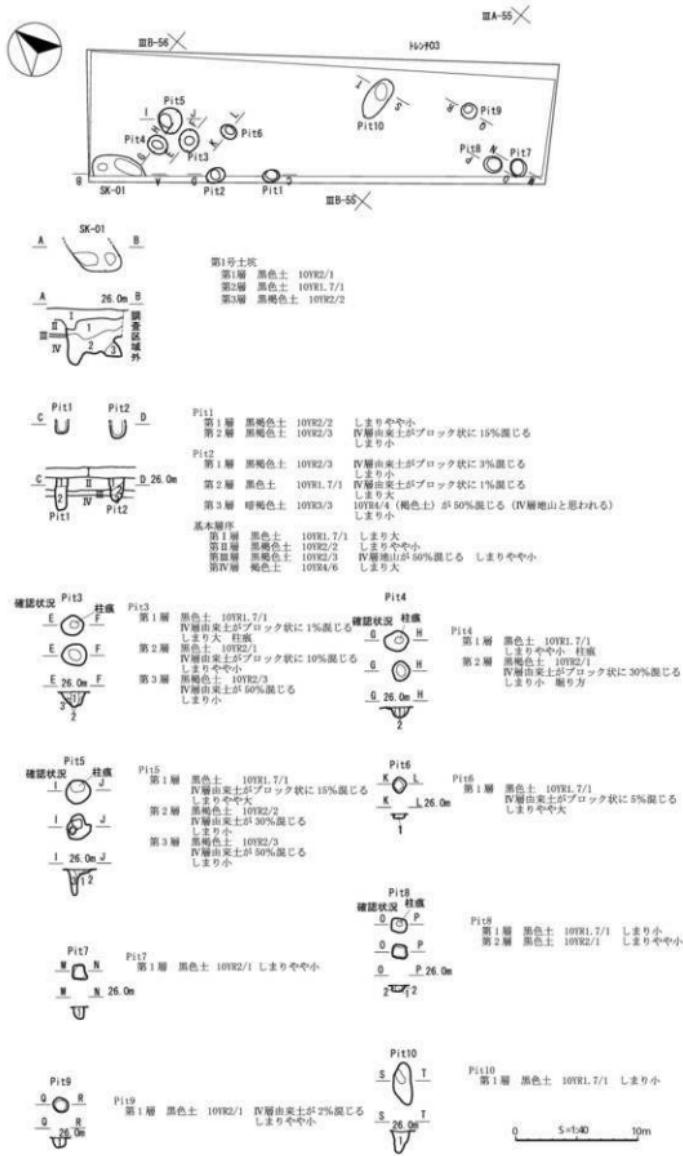


図10 土坑・ビット

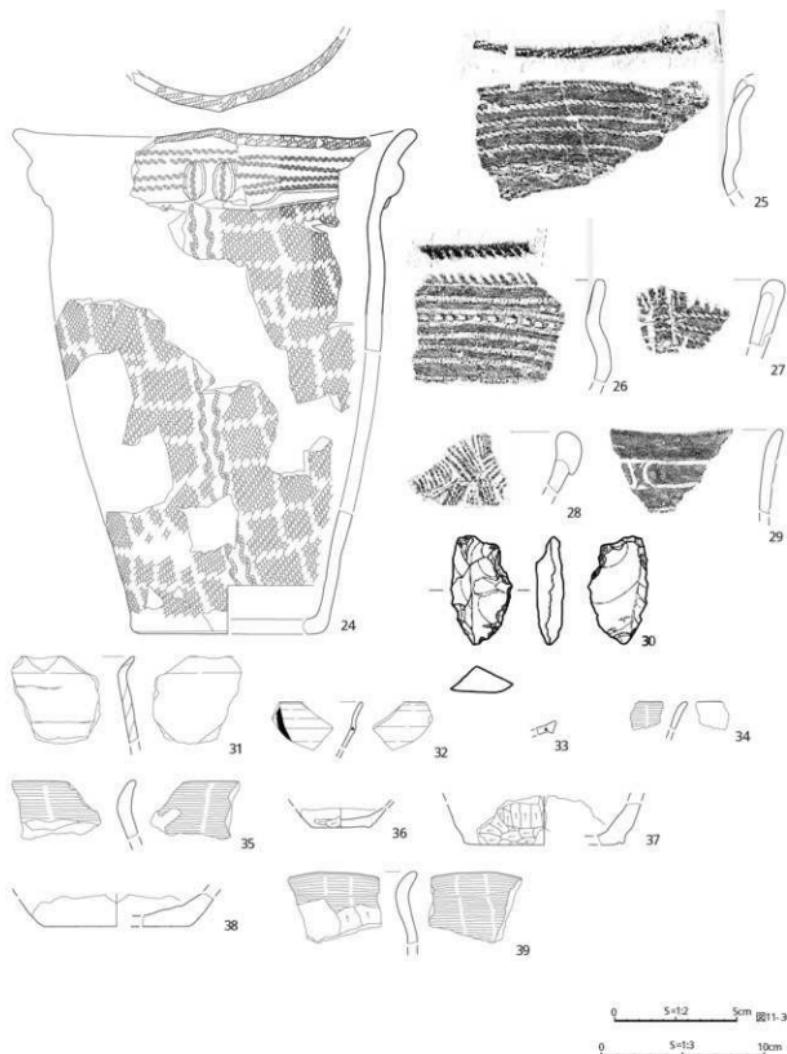


図11 遺構外出土遺物

## 第4章 まとめ

今回の調査では、大溝（溝7）を含み溝9条、土坑1基、ピット10基が確認された。特に溝7は集落を囲う溝である可能性が高い。堆積土中に白頭山起源の火山灰が確認されないことと出土遺物の年代観から、溝7は10世紀中頃から後半に機能していた可能性が高い。ちょうど、いわゆる防御性集落が盛行しはじめる時期である。今年度の調査区にあたる溝7南東部は、浅い溝やピットなどは確認されるが住居跡がないことと、IIラインから南東部では遺物が全く出土しないことから、遺跡の主体は溝3から北西部に存在する可能性が高い。

個体の復元可能な土師器・須恵器はほとんど溝7からの出土である。他の平安時代に属する出土遺物はIIラインから北西部に集中している。溝やピットの存在と遺物の出土が対応している。このことから集落本体はIIラインから北西部に存在すると推定される。今回の調査では住居跡は発見されなかつたが、平成20年度に調査される予定の調査区北西部は大溝に囲まれた内部分と推測されるため、住居跡などの発見が予想される。

また、縄文土器はトレーナー04の南東部の遺構外から集中して出土した。縄文土器は円筒下層d2式、円筒上層a式に属する。今年度調査区の他の箇所ではほとんど出土しないことから、この付近に当該時期に属する縄文時代の遺構が存在している可能性がある。

近世以降の遺物については太平洋戦争時に関係すると推測される遺物がある。本遺跡の戦時中ににおける生活の一端を示しているといえる。

今年度の調査で出土した遺物は段ボール箱1箱と非常に少ない。縄文時代と平安時代の遺物が出土しているが、これらの遺物量から今回の調査区が遺跡の中心部ではなく周縁部であることが推測される。

なお、今回の調査区ではないが、郷山前農村公園前の電話ボックス付近では馬と推測される獸骨が表面採集されている。また縄文時代中期前葉に属する土器が道端に集積されていた事例も確認されている。これらの状況も平成20年度の調査区が遺跡の主体部分であることを示唆している。

### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1998『隈無（1）遺跡・隈無（2）遺跡・隈無（6）遺跡』  
青森県埋蔵文化財調査報告書第237集
- 青森県 2005『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』
- 青森県 2003『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』

十郎翁

図版番号	監視番号	出土地点	層位	基盤	部位	外表面形	内面形態	底面	口径(cm)	標高(cm)	底径(cm)	備考
7-1	4	横7	下層	鉢	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ		3.5			
7-2	18	横7	下層	鉢	底部	ハラケズキ	回転・角切(右)		1.6	5.0		海綿骨針、断続的に調節痕不明
7-3	1	横7	7層	甕	口縁部	ナデ、ヘラケズキ	ナデ、ヘラナデ		8.5			
7-4	2	横7	6層	鉢	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ		2.9			
7-5	15	横7	7層	甕	底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転・角切(右)	2.3	5.8		
7-6	16	横7	7層	甕	底部	ヘラケズキ	ヘラナデ	砂底	2.4	8.6		
7-7	17	横7	10層	小甕	底部	ハラケズキ	ヘラナデ		5.1	4.8		海綿骨針
7-8	5	横7	上層	甕	口縁部	ナデ、ヘラナデ、ヘラケズキ	ナデ、ヘラナデ		6.2			
7-9	3	横7	7層	甕	口縁部	ナデ、ヘラケズキ	ナデ、ヘラナデ		7.1			海綿骨針

剥片

図版番号	監視番号	出土地点	層位	長径(cm)	外径(cm)	内径(cm)	備考
9-23	14	横7	10層	11.8		7.1	3.2

雨森

図版番号	監視番号	出土地点	層位	基盤	部位	外表面形	内面形態	底面	口径(cm)	標高(cm)	底径(cm)	備考	成形	記号
7-10	21	横7	7層	甕	頭部～胴部	頭部:ロクロナデ、胴部:タキナ	頭部:ロクロナデ、胴部:タキナ	頭部:あて具微(円形)		8.9		海綿骨針	ねじり作	
7-11	20	横7	9層	甕	頭部～胴部	頭部:ロクロナデ、胴部:タキナ	頭部:ロクロナデ、胴部:タキナ	頭部:あて具微(円形)		8.8		海綿骨針		
8-12	19	横7	7層	甕	底部	ロクロナデ→ヘラケズキ	ロクロナデ			12.1	9.0	海綿骨針		
8-13	23	横7	7層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			17.0		海綿骨針		
8-14	24	横7	10層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			19.5		海綿骨針		
9-15	29	横7	7層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			12.3		海綿骨針		
9-16	31	横7	7層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)、ヘラナデ			10.0		海綿骨針		
9-17	25	横7	7層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			9.2		海綿骨針		
9-18	28	横7	高圧	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			12.6		海綿骨針		
9-19	22	横7	10層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			8.7		海綿骨針		
9-20	26	横7	上層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			13.8		海綿骨針		
9-21	27	横7	10層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			10.2		海綿骨針		
9-22	30	横7	4層	甕	頭部	タキナ	あて具微(円形)			7.7		海綿骨針		

遺物外

縄土器

図版番号	監視番号	出土地点	層位	基盤	外表面	内面	分類	備考						
				口縁部	口縁部	頭部	頭部							
11-24	6	IW-51	II層	甕	LH縮文	LH縮正、粘土貼付-IJ側面	粘土貼付-IJ側面	下層42			皮状口縁			
11-25	1	IW-51	II層	甕	LH縮	(LH縮) 粘土貼付	LH縮			下層42				
11-26	2	IW-51	II層	甕	R単輪筋条体側正	R単輪筋条体側正、肩部未施工	R単輪筋条体側正	下層42						
11-27	3	IW-51	II層	甕	R単輪筋	R単輪筋		上層a						
11-28	4	IW-51	II層	甕	R単輪筋条体側正	R単輪筋条体側正、粘土貼付-IJ側面		上層a						
11-29	5	ID-58	Ia層	甕	北縮	R単輪筋条体側正		上層Ia			皮状口縁			

十郎翁

図版番号	監視番号	出土地点	層位	基盤	部位	外表面形	内面形態	底面	口径(cm)	標高(cm)	底径(cm)	備考
11-31	6	IW-65	II層	甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ		5.3			肩部施く調節痕不明
11-34	9	IW-89	I層	甕	口縁部	ロクロナデ	ミギナ		1.8			内底
11-35	7	IW-65	II層	甕	口縁部	ナデ	ナデ		3.6			
11-36	13	IW-65	II層	甕	底部	ハラケズキ			1.2	4.0		内底施れ施く調節痕不明
11-37	11	IW-81	I層	甕	底部	ハラケズキ	ナデ		3.0	10.0		
11-38	12	IW-65	II層	甕	底部	ハラケズキ	柱目状疣痕		2.0	9.0		内底施れ施く調節痕不明
11-39	8	IW-90	I層	甕	口縁部	ナデ、ヘラケズキ	ナデ		4.4			

東部

図版番号	監視番号	出土地点	層位	基盤	外表面形	内面	底面	口径(cm)	標高(cm)	底径(cm)	備考	
11-32	10	IPF-60	I層	鉢	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ		2.9			外底火痕
11-33	32	IW-90	I層	良質	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ		1.3			

石器

図版番号	監視番号	出土位置	層位	種類	長径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
11-30	IV-V-95	I層	不定	刃	4.4	1.6	1.1	13.1	貝質白石	



作業風景 西から



作業風景 西から



トレンチ13 基本層序 東から



トレンチ03 ピット完掘状況 北西から



溝1 南西から



溝2・3 北西から



溝4 a・4 b 北西から



溝5 西から

写真1



溝6 東から



溝7 東から



溝7 北から



溝8 北西から



図11- 24



図11- 25

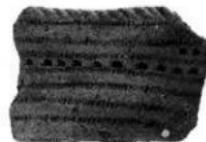


図11- 26



図11- 27



図11- 28



図11- 29

写真2

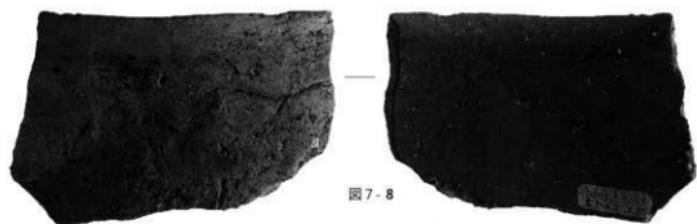


图7-8

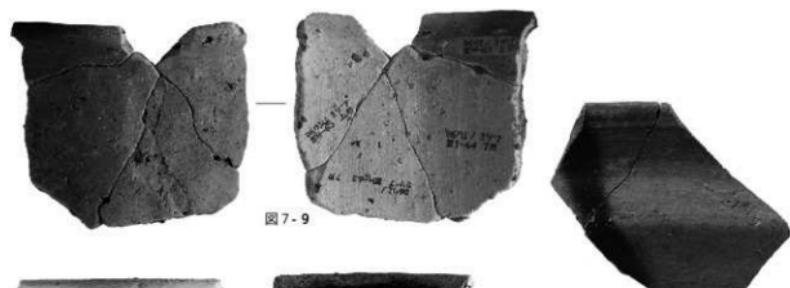


图7-9

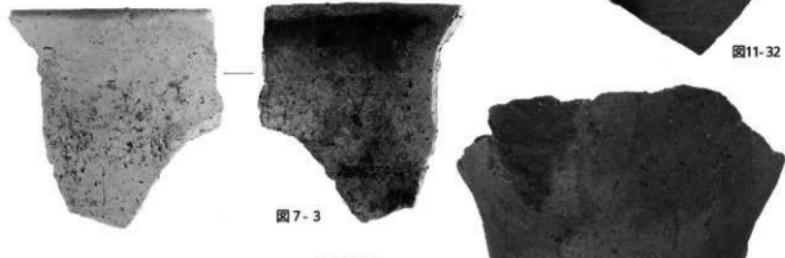


图7-3

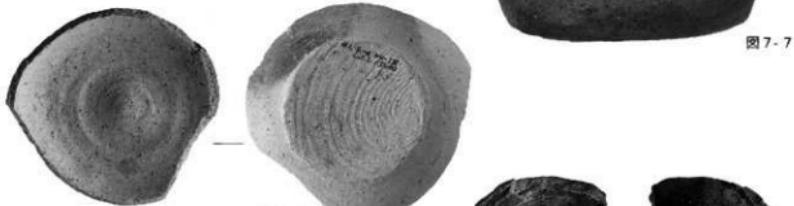


图7-5

写真3



图11-37

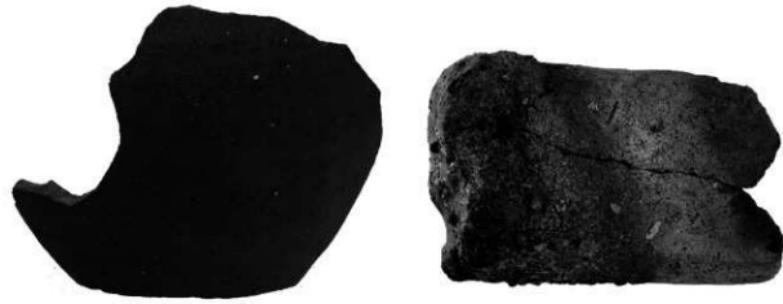
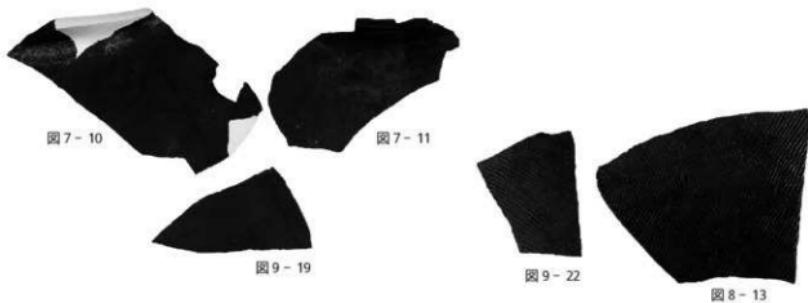
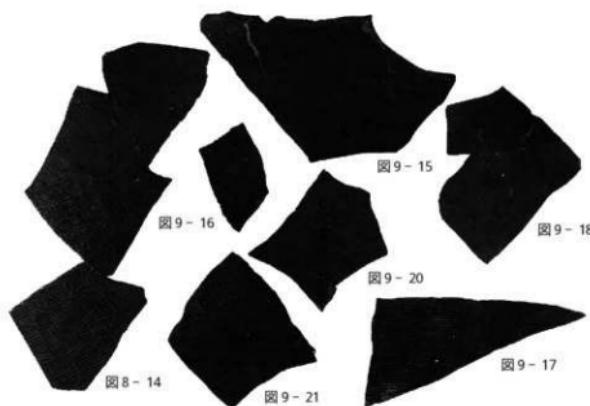


写真4

## 報告書抄録

ふりがな	うえのいせき								
書名	上野遺跡								
副書名	県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第445集								
編著者名	岩田 安之・小幡 育恵・畠山 畏								
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター								
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL. 017-788-5701								
発行機関	青森県教育委員会								
発行年月日	西暦2008年3月7日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因		
うえの 上野遺跡	あおもりけんあおもり 青森県青森 し なみおかああざ 市浪岡大字 たるさわあざむらもと 椿沢字村元 ち な い 地内	02201	29011	北緯	東経	2006 0801 ~ 2006 0929	県道五所川原 浪岡線交通安全 施設整備事 業に伴う事前 調査		
				40°	140°				
				42'	33'				
				37"	33"				
				世界測地系 (J GD2000)		北緯		230	
				東経		40°		140°	
				42'		42'		33'	
				47"		47"		21"	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
上野遺跡	集落跡	平安時代	溝 9条	土師器					
			土坑 1基	須恵器					
		Pit 10基	縄文土器						
要約	調査の結果、平安時代の遺構はトレント06の溝3から北東部にのみ確認された。このことから、遺跡の主体は、溝3から北東部方面であることが推測される。縄文土器もトレント04でまとまって出土したことから、近隣に集落などの存在が示唆される。								

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第445集

## 上野遺跡

- 県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 -

発行年月日 平成20年3月7日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 青森相互印刷株式会社

〒038-0013 青森市久須志四丁目1-25

TEL 017-766-5161 FAX 017-766-5162

---